

二〇二六年度

第一回入学試験問題

【国語】 時間 45分

【校長からのメッセージ】
おはようございます。

あなたの新しい一歩となる朝です。

深呼吸をして、ゆっくりと気持ちを整えましょう。

左の【注意】をよく読んでから始めてください。

これまでふれてきた言葉や思いが、きつとあなたの味方になります。

自分を信じて、一問一問をていねいに読みましょう。

大丈夫。あなたの中には、たくさん言葉の力があります。

【注意】 1 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。

2 問題用紙は、全部で14ページあります。試験中によごれや不足しているページに気づいた場合は、手をあげて監督かんとくの先生を呼んでください。

3 解答用紙は問題用紙にはさまれています。

4 問いに字数指定がある場合には、最初のマス目から書き始めてください。なお、句読点なども一字分に数えます。

受験番号	氏名

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

あたしの父と母は、耳が聴こえない。だから小学一年生の時にはもう、両親の手話通訳をやっていたと思う。

「カナちゃん、大変だねえ」

「えらいね、カナちゃん」

周りの大人から言葉をかけられても、別に何も思わなかった。だって、あたしには普通のことだから。褒められたり、同情されたりするようなことではない。

「カナちゃんって、大人びてるよね」

同級生にはそんなことも言われた。

そんなの当たり前だ。だって、みんながおしゃべりしている時、あたしは大人と渡り合っていたんだから。

保険や新聞の勧誘、制度や補助金の説明をする市役所の人、理容店を営む両親の仕事にクレームをつけるお客さん、そして子ども会の会合。

大好きな両親が困らないように、大切な両親が「聴こえないこと」で誤解されないように、あたしが守るんだと、そう心に決めていた。

家にかかってくる電話も、学校の先生と親との面談も、通訳してきた。

『お店の入り口に飾ってる風鈴さあ、うるさいんだよね。気がつかないんだらうけどさ。片付けてくれない？』

『日永さん、今度の文化祭で先生たちとPTAで合唱を披露するんだけど……。お母さんって、どうかな？ 参加したいかなあ？ ちよっと訊いてほしいんだ』

時には、刺々しい内容を和らげて伝える。

言葉の刃が通過するたび心が削られ続け、その削りかすは、澱のように心の奥底に沈殿していった。でも、あたしには澱を浄化してくれる太陽のような存在がいた。

ママン。

といつても、母ではない。その双子の姉、つまりは伯母だ。

「中田陽子」という名前なのだけど、喋り始めたころのあたしが、なぜか「ママン」と呼んだのがめっちゃ気に入ったらしく（当然ながら、あたしにはその記憶はない）、そのまま定着してしまった。

ママンは、あたしの心に澱が溜まったのを見越したようなタイミングで家に来る。魔法使いみたいだ。そして、あたしが出迎えるとギョツと抱きしめて、こう言うのだ。

「可愛い姪っ子ちゃん、会いたかった」

そして、頬を頭にグリグリと押し付ける。

「カナは、アタシの一番の宝物だよ」

その温かい腕と胸、そして言葉は、澱を溶かして流してくれた。だからあたしは変な方向にそれることなく、大きくなれたのだと思う。

だけど心のどこかで分かっていた。いつまでもママンは来てはくれない。自分で澱を処理できるようにならなくてはと。あれは、小学校五年生だった。

一学期の終業式が終わり、いつものようにさっさと帰ろうとすると、クラスメートに「新しいゲーム買ったから、うちで遊ぼう」と誘われたのだ。

〈午後、保険の解約に行ってくる。留守番しててね〉と母に言われていたあたしは誘いを断り、早足で家へと向かった。〈カナ、通訳はしなくていいよ。筆談してくれるってさ〉

母は言ったけど、あたしは行くと決めていた。だって前に、筆談が面倒だと露骨に表情に出していた店員さんがいた。今日の相手もそんな人だったら、お母さんが傷ついてしまう。あたしがゲームを我慢すれば済む話だ。ホントは遊びたいけど。

母が支度する間、あたしは庭石に座りぼんやり花壇を眺めていた。

とても暑い日だった。まわりつく湿気から逃げるように、母にもらったペットボトルのサイダーを抱えていた。花壇のひまわりが、燦々と輝く太陽に向かって元気に咲いていた。蝶がその前を横切っていく。

ひらひら、ひらひらと。

気ままに舞い、誰にも邪魔されず飛んでいく。

自由だなあ。いいなあ。なーんにも考えないで、心配もしないで、好きなように飛んで好きなところへ行けて。

あたしは自分の役割から逃れられない。その前に、逃れようとも思わなかった。部活も習い事もしたいと言ったことはない。学校以外の時間は、両親のためのものだったから。だって、あたしがいない間に両親に困りごとがあったらイヤなもの。

親を守らなければという義務感は、活力だった。だけど、自分が大きくなるにつれて、苦しさも感じ始めていた。小さいころ大好きだった服が、キツくなってるみたい。

蝶への羨望をぶつけるように、力をこめてペットボトルの蓋を開ける。

——しゅぱっ

なんて心地の良い音だろう。耳から頭を抜けて天まで届きそう。あたしの心に溜まった澱を、宇宙まで連れ去ってくれる気がした。

——でも、音が与えてくれる気持ち良さは、両親には分からない。

罪悪感と快感の間で揺れ動いていると、理容店の白い服からよそ行きの服になった母が庭に出てきた。あたしは慌てて立ち上がり、車に乗り込んだ。

② 炭酸飲料は、それからずっとあたしの癒しになってくれた。

——あたしもみんなのように、自由に遊べたら。

——祐里奈ちゃんが音楽の授業でピアノ弾いてた。あたしも習ってみたい。

親に言えない心のもやもやを感じた時や何か我慢をした時。

——しゅぱっ

蓋を開けて発散するようになった。爪をかじったり抜毛するよりは健康的な方法だと我ながら思っていた。中学生になっても、あたしの使命感は変わらなかった。

周りの子たちは親をウザがるようになって、「こないだの日曜日は部屋に籠って、ドア越しにししか親としゃべらなかつたよ」「俺は絶対に親の顔見ないもんね」なんて言っていたけど、そんなことをしたら我が家は意思疎通ができない。

テレビや雑誌で「子どもが口をきいてくれない」「かわりを持ってくれない」と大人が嘆く「思春期」というものは、あた

しには訪れなかった。

気づいたことがある。

世界はふたつあるのだ。

ひとつは両親がいる聴こえない世界で、もうひとつは外の聴こえる世界だ。ふたつの世界をつなぐ役割が、あたし。そして、あたしのような存在には名前があるということも知った。

Children of Deaf Adults。

コーダ——聴覚障害の親を持つ、聴者の子どものことだ。

【 中 略 】

カナは、若草ろう学校との交流会で気まずい思いをしたので、愚痴を聞いてもらおうと、ママンの店「カフェ アライン」に行った。しかし、自分のお気に入りの席に若草ろう学校の生徒の木花さんが座っていたことが気に入らず、「ママンのバカ！ もう来ない！」と伝え、涙をこらえて家に帰った。

次の日が土曜日でよかった。学校に行ったら、昨日の交流やアラインでのことを思い出して、イヤな気持ちがぶり返しそうだから。

週末、あたしは可能な限り家にいる。両親は「今は文字起こしアプリもあるし、大丈夫だよ」と言うけど、お店の常連さんの年齢層は高い。「アプリなんて冷たい」と文句が出るし、看板娘が通訳した方が喜ぶのだ。あたしは常時お店に出ているわけではないけど、部屋でスマホの無料ゲームをしながら待機している。今日はいつものパズルゲームじゃなくて、音ゲーにした。週末の二日間、楽しい音楽に合わせリズムカルに画面に流れる星を叩いて星屑に変えまくったらスッキリした。

だんだん、アラインでの出来事も冷静に思い返せるようになっていた。そもそも、ママンはお店のオーナーという立場だし、姪よりお客さんを優先するのは当たり前だ。明日はまた普通にアラインに寄ってみよう。

「ママ、来たよー」

週明け、いつものようにお店に行ってビックリ、木花さんがいたのだ。さらに、もうひとり男性のお客さんも。

「一瞬」またしても！」と凍り付きそうになったけど、あたしの指定席は空いていた。男性のお客さんも別の席だ。ホツとしたら、蒸し暑さが気になつてきた。

木花さんの手元に置かれたアイステイアのグラスは水滴をまとっていて、見るからに涼しそう。長い髪をかき上げながら本を眺める姿は、平安時代のお姫様が歌集でも読んでもみたいだ。心に反して、つい目で追つてしまう。男性の卓袱台をひよいと覗くと、やつぱりアイステイアがある。つられてあたしもオーダーした。

早く自分の世界に籠ろう。指定席に座り、足を崩した。

背中から荷物が無くなつたみたいなのに、気分が軽くなる。アイステイアを飲みながら庭を眺めれば、あたしの心は蝶になり、ひらひらと自由に舞い上がっていく。

廊下から足音が近づいてきた。ママンだ。話しかけようとしたら、一直線に木花さんの方に行つてしまった。今はあたしだけでお客さんなのに。

衝立の隙間から、腰を下ろしたママンと木花さんが手で会話しているのが見えた。

〈む、から始まる歌は一首しかない。だから、読み始めた瞬間に下の句の……〉

木花さんは真面目な顔で、何度も何度も頷いている。

雑談じゃない、競技かるたの話をしているんだ。

彼女の反応が嬉しいのか、ママンが語る手の動きも大きく、表情もさらに豊かになっていく。

ママンが木花さんに教えている！ ああ美しく華やかな競技かるたを。ママンの世界へ誘っている、あたしじゃなく彼女を。衝立を勢いよくどけた。あたしに背中を向けていたママンが、キョトンとした顔で振り返る。

〈ママン、その子に競技かるた教えてるの？〉

〈そうだよ〉

なんで……あたしには教えてくれないのに。

〈カナは、やりたくないって言ったでしょ〉

どうして、ママンは分かってくれないんだ、あたしはたったひとりの姪っ子なのに。

木花さんがあたしを見ている。その目に揶揄はない。同情か、憐憫か。でも、そんなものあたしはいらない。

〈やりたくないんじゃない、やれなかったんだよ！〉

——可愛い姪っ子ちゃん、会いたかった。

——カナは、アタシの一番の宝物だよ。

③ あんなに可愛がつてくれたのに、大切にしてくれたのに。

揺るぎなかった大地に亀裂が入って、見えない底に落ちていく。

ママンがあたしより彼女を優先するなら、あたしの味方をしてくれないなら、もういい。あたしはアラインを飛び出し、家に向かった。

視界がにじむ。すれ違う人たちが、目を丸くしてあたしを見る。喉に力が入らず、もう飲み込めない。目も鼻もグシャグシャだ。

——バカじゃないの？ 子どもみたいに泣いてんじゃないよ、みっともない。

——だって無理だよ、もう無理。苦しいんだもん、辛いんだもん。

頭の中で、自分同士がケンカしている。耳を塞いでも言い争う声が聞こえてきて、耐え切れず首を振る。

家が見えてきた。泣きやまなきや……と思えば思うほど、しゃくりあげる声が大きくなっていく。

顔が見えないように、お店にいた両親の間をすり抜け、自分の部屋に飛び込んだ。

ぶちんと縛りつけていた紐が切れた。言葉にならない言葉を叫ぶ、ベッドを叩きつける。それでも両親には聴こえない。気づかれなくていい。でも気づいてほしい。感情同士もケンカを始め、どうしていいか分からずベッドに伏せることしかできなかった。

心配がした。ドアが開いて、足音が近づいてくる。この雰囲気はきつと母だ。

顔を伏せたまま「あっちへ行行って」「ほっといて」と言っても母には伝わらない。顔を上げ、向き合わなければ。

——あたしはコダダ。

(注) 三つ星は決して離れず並んだまま宙をめぐる。荷う運命から逃れられないなら、せめてその重みを分かかってほしい。

顔を拭い、体を起こした。あたしの涙なんて、赤ちゃんのころしか見たことないはずだ。戸惑いの表情を見せる母がベッドに

腰かける。

〈どうしたの？ 何があった？〉

いつもだったら、無表情で両手を半回転して「何もないよ」の手話をして終了だ。

でも、心に溜まった澱は手の動きを爆発させた。右手が喉に伸び、下へ引きながら思い切り閉じる。「したい」の手話だ。口を大きく開き、聴こえないのは分かっているけど叫ばずにはいられない。

〈やりたいことがあるんだよ！ あたしだって〉

腐り、毒と化していた澱を吐き出した。

〈あたしは小さいころから通訳をやってきた。自分の時間を捧げてきたけど、大好きなお父さんとお母さんのためだから苦じゃなかったし、むしろ嬉しかったんだよ。でも、辛いつていう気持ち芽生えてきて、大きくなつていった。そんなことをお母さんたちが知ったら、傷ついちゃう。だからあたしは自分を押さえ込んだの。耐えろ、頑張れつて〉

でも、限界が来た。今、あたしの何かが壊れてしまった。

母はあたしの手話と泣き顔を、ただひたすら眺めている。感情を爆発させるあたしなんて初めてだから、どうしていいかわからないに違いない。瞳が潤んでいる。

眉間をつまむようにし、手を開き指を揃えて下ろした。「ごめん」の手話だ。

〈お父さんもお母さんも、カナに甘えてた。進んで通訳してくれてたし。手話通訳の派遣を依頼したり、タブレットを使おうとするとカナがイヤがるから、逆に、頼まないと悪いのかなど勘違いしちゃった。カナは我慢してるんだって思い至るべきだったのに……ごめんね〉

そうか。言わなきゃ、気づいてもらえないんだ。

〈……あたし、本当に大好きなんだよ。大切なんだよ、お母さんもお父さんも。あたしがいないことで、辛い思いをしたらイヤだったから。あたしが守らなきゃと……〉

母はあたしの髪をグシャグシャとかきまわした。そして左手を握り、右手で何度も撫でる。愛おしそうに。

〈カナ、ありがとう。でもね、お父さんもお母さんも小さいころから訓練してきたし、世間の風にも当たってきた。カナの何倍生きてると思うの？ だから大丈夫なんだよ。そんなに心配しなくても。お店だって〉

うん、うん。あたしは目を拭いながら頷いた。

〈でも、あたし目当てのお客さんが多いのも事実でしょ？ 看板娘だもん〉

母の動きが止まった。

〈まあ……常連さんたちは、孫娘みたいなカナの成長を見に来てるといふ側面もあるね〉

思わず、くすつと笑ってしまう。

〈週末は今まで通りでいいよ。まずは平日から。学校帰りに、ママンのカフェにもつと寄ってもいい？〉

〈もちろんだよ！ お姉ちゃんを稼かせがせてあげなきゃ〉

〈実は……競技かるたもやりたいんだ。カフェに行った時に、ママんに教えてもらって。それも、いい？〉

〈なんだ、もっと早く言つてよ。言われなきゃ分からないんだから。いや、親なのに気づいてあげられなかったんだよね。ごめん〉

母に気を取られていたけど、ドアの陰かげに父が立ち尽くつくしていた。あたしと母の深刻な雰囲気ふんいきに、どうしたらいいのか分からないうのだ。

手招きをすると、ママンと張り合うくらいきょたいの巨体を揺らしながら来た父は、あたしの右隣みぎどなりに腰を下ろし頭を撫でる。左隣の母は、あたしの背中を優やさしく叩いた。

ふたりから、温かい何かが伝わってくる。

……三つ星なんだな、あたしたち。^④連なることから逃れられない苦しさもあるけど、つながることで得られる安らぎもあるんだ。

(村崎なぎこ『オリオンは静かに詠う』)

(注) 三つ星……オリオン座の中心に並んだ三つの星のこと。

問一 — 線部① 「自分の役割」とはどのようなことですか、答えなさい。

問二 — 線部② 「あたしの癒しになってくれた」とありますが、それはなぜですか、説明しなさい。

問三 — 線部③ 「揺るぎなかった大地に亀裂が入って、見えない底に落ちていく」とは、どのようなことですか、説明しなさい。

問四 — 線部④ 「連なることから逃れられない苦しさもあるけど、つながること得られる安らぎもあるんだ」とありますが、「つながること得られる安らぎもあるんだ」と気づいたのはなぜですか。カナの気持ちをもふくめて説明しなさい。

二

次の文章は、お年寄りたちが思い思いに時間を過ごす「宅老所たくろうじよよりあい」を運営する村瀬孝生さんと、美学者・伊藤亜紗さんとの間で交わされた手紙のやりとりのうち、伊藤さんが村瀬さんに送った返信の一部にあたります。これを読んで、後の問いに答えなさい。

お返事ありがとうございます。今回もとても感動しました。お手紙を読むと、いつも初めての場所に連れ出される感じがします。

村瀬さんは介護者としてお年寄りの抗あらがいをケアしているけれど、お年寄りもまた村瀬さんに関わられることで振り回まわされており、村瀬さんの抗あらがいをケアしているのだ、と。考えてもみなかったことですが、きつとそうなのでしょうね。「抗あらがい」の観点から見ることによって初めて、ケアすることがケアされることでもある、という側面に気付かされました。

ただしその場合のケアは、「相手のためを思って」みたいな目論見もくろみによってなされるものではないわけですよ。むしろそれは、目論見レベルではすれ違ちがっているのに、演奏としてはシンクロしている不思議な即興音楽そつぎやうみたいなものですね。盲導犬もうちうけんである村瀬さんを想像したら、最近読んだオオカミの話の思い出しました。

アリス・ロバーツというイギリスの人類学者が書いた『飼かいいならず』(斎藤隆央さいとうりゅうお訳、明石書店)という本です。この本は、イヌ、コムギ、ウシ、トウモロコシなど、人間によって飼育栽培かいばいされるようになった一〇種類の動植物が、どのようにしてそのような関係を人間と取り結ぶにいたったのかを描えがき出だしています。考古学や遺伝子解析かかせきなど最新の科学の知見を駆使くしして描かれた壮大な本です。

面白おもしろかったのは、飼かいいならず過程こていというのは、一般いっぱんに想像されるような「もともと野生だった動植物を、人間が自分の目的にかなうようにうまく手懐てなずけて、品種改良していった」というようなものではない、ということですよ。

言われてみれば当たり前なのですが、どんな生き物だって、自分と違う種をそんなに都合よくコントロールできるわけではないですよ。もしそんなことができていたら、人間は地球上のあらゆる動植物を、自分の思い通りにあやつっていたはずですよ。

飼かいいならず過程こていは、もつと非意図的べいじゆんで、偶然ぐうぜんに満ちていたはずだ、とロバーツは言います。そして「飼かいいならず」とはむしろ、

ある種の動植物がもっていた「飼いならされる力」を、そうとは知らず、人間が解放しただけにすぎないのではないかと、と。一章はイヌについての話で、そこでイヌの先祖であるオオカミのことが出てきます。さまざまな研究結果が示しているのは、オオカミが人間と協力するようになったのは氷河期ではないか、ということ。当時、人間はまだ狩猟採集民でした。集団でトナカイなどを狩って食していましたが、原始宗教的な意味があったのか、頭部は食わずに森に返す習慣があったと考えられています。

その食べかすを狙ってやってきたのがオオカミです。自分で狩るよりも、おこぼれをもらったほうが、はるかに楽だからです。それで、次第にオオカミがテントのまわりをうろつくようになる。オオカミは好奇心が強く、それでいて慎重な動物です。人間も、近づきすぎたオオカミには攻撃をしたでしょうが、強面の彼らが近くにいることで、他の動物から身を守れるという利点にも気付いたはず。す。

どっちがどっちを選んだのかはよくわからない、とロバーツは言います。いずれにせよ、人間が「飼いならし」だと思っていた過程は、実は「それぞれに利害関係を持った種のゆるやかな共生」のようなものであった可能性が高いのです。

そして、①そんな共生が長く続くうちに、次第にオオカミは進化をしていきます。尻尾をあげ、より警戒心の低い現在の「イヌ」になっていったのです。もちろん盲導犬も、そのようにしてイヌに進化していった元オオカミの一員です。

ポイントは、こうした共生の過程で、人間もまた進化していった、ということ。オオカミをはじめとするさまざまな動物と共生する中で、人間は、男性の攻撃性を減少させ、他の個体と協力する社交性を身につけるに至ったのです。一種の「共生化」ですね。一緒にいるだけで変わってしまう、種の枠組みが流動化してしまう、ということに驚かされます。

というわけで、「飼いならす」は実は「飼いならされ」でもあった、というのが本書のオチです。イヌやウシやウマを飼いならしたと思っていた人間は、実は一番うまく家畜化された種だった、ということですね(だから、本書の最終章は「ヒト」に充てられています)。

【 中 略 】

一緒にいる、というのはとても不思議なことですね。一緒にいる、というのは「思える」の次元でしか起こりえない出来事で

あつて、常にズレを孕はらんでいるものです。コバンザメとジンベイザメも、ヤドリギとそれが乗っかっている木も、たぶんそんな感じなのでしょう。細胞さいぼう同士の関係も、そうなのかもしれません。自然界では、^②村瀬さんの言う「ズレまくりながら調和している」が当たり前なのかもしれません。

一緒にいるためにお互たがいをケアしているのですが、そうしているうちに、思ってもいない方向へ進化の一步を踏ふみ出だしているわけです。村瀬さんも、お年寄りと関わることで、既成概念きせいがいねんがずいぶんと解体されたと書かれています。

「今日」「犬」「私」。確かに概念は、私たちに共通の認識にんしきを作り出す道具です。しかしながら、時間と空間の見当が覚束おぼつかなくなり、言葉も記憶きおくも曖昧あいまいになり始めたお年寄りは、概念に依よらずに世界を、人を、とらえています。誤解ごせを恐れずに言えば、別の種ほどにも根本が異なる存在に、介助かいじょする人が巻き込まれていく。巻き込まれる、というのは一種の進化ですね (be involved=evolution?)。

お年寄りたちは、村瀬さんだけでなく、周囲の物も進化させているように見えます。進化、というと変ですが、物のいろいろな可能性を引き出していますね。

(伊藤亜紗・村瀬孝生『ぼけと利他』)

問一 — 線部① 「そんな共生」とは具体的にどのような状態ですか、説明しなさい。

問二 — 線部② 「村瀬さんの言う『ズレまくりながら調和している』とありますが、次の**村瀬さんから伊藤さんへの手紙の一部**にある例を使って「ズレまくりながら調和している」ことを説明しなさい。

村瀬さんから伊藤さんへの手紙の一部

あるお爺さんを思い出します。

ことごとく、次の行為に移れないお爺さんです。迎えに行っても、椅子から立たない。立っても玄関に行かない。玄関に行っても靴を履かない。やっと靴を履いて送迎車にたどり着いても乗らない。お爺さんとしては、よりあいに行く理由がないのですから当然です。だから、ひとつひとつ生じる抗いを尊重しないとお爺さんから信頼が得られないと思いました。

さらに、このお爺さんが面白いのは送迎するとき「車に乗りましょう」では伝わらないことでした。「そろそろ船が出ますよ」と伝えると「ああ、そうか」と言って車に乗ってくれるのです。それには理由らしき過去があったのです。

お爺さんは太平洋戦争の敗北を朝鮮(現在の北朝鮮)で迎えました。すでにソ連軍の配下にあった港には、日本の船が邦人救出のために寄港することができませんでした。当時、若かりしお爺さんは同朋と闇舟を手配して命からがら脱出してきたのです。

ぼけを抱えて生じる危機感と当時の危機感がシンクロして「車」が「船」になったと思われる節があるのです。介助を通してお爺さんの背負った歴史を知り、その重さを感じることになります。

三

各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 議会の解散はヒツシである。
- (2) ヨウリヨウよく話を進める。
- (3) 美しいジキの皿をかざる。
- (4) 日本をジュウダンする旅に出たい。
- (5) キシカイセイのホームランを打つ。

受験番号

氏名

得点

問一

問二

問三

問四

問一

問二

問三

問四

問一

(1)	問二				問一		問二				問三				問二			問一
(2)																		
(3)																		
(4)																		
(5)																		



262110



↑ここにシールを貼ってください↑